

日本列島における都城形成

——大宰府羅城の復元を中心に——

阿 部 義 平

1. はじめに

2. 倭の京まで

3. 大宰府の復元

——羅城と山城のある都城の追求——

4. 小論の結び

論文要旨

日本列島中央部に形成された倭国は日本とよぶ中央集権国家に発展していくが、その過程で同一の国家でありながら10余の京——都城を形成し、変遷を重ねた。その内には条坊式の方格地割をもつ都城が5例ある。これらは中国の都城を制度として継受して造られた。ではそれ以外の都城はどんな実態で、都城全体はどう形成されてきたのか。条坊式都城より非条坊式都城が先行して出現するだけでなく、併行して営まれたものもある。非条坊式都城は副次的に把えられてきたが、かえって国家権力の本質や日本での都市の骨格を示すとみることもできると考える。

非条坊式都城は、ほぼ7世紀代の100年間、倭の飛鳥に営まれた倭京（やまとのみやこ）から始まる。宮殿や豪族邸宅や寺、饗宴のための苑池、防備施設などが広大な地域を占めていた。650年代からは山城などの防備の中核施設も領域内に営まれたとみられる。このような防備された都市として最も典型的のが九州の大宰府である。大宰府は朝鮮半島の三国の都城の重要な要素を継受し、亡命百済人の手で造営が指導された。その水城、小水城、山城、政庁、都市部分が発掘されている。しかし羅城は西側に認められるだけで、全貌は明らかでなかった。羅城南辺に当るとうれぎ土塁の発見により東側にも西側と同原則で羅城が復元できることが判った。その羅城内は郭と呼ばれ、正南北方向の地割をもち、左郭・右郭・南郭に分けられていた。南郭には条里が施行された。左・右郭の条坊も朱雀大路などの設けられた奈良時代前半ころには存在し、後に郭の中央部では10世紀に大規模な都市再開発がされたことも判明してきた。大宰府は朝鮮半島の都城よりも雄大な構想をもつもので、宮が遷されたことがないので京とは呼ばれないが、都城の一形態と評価できる。自然地形も最大限に利用した都城の型式は、畿内の都城を点検する上で原点となる。都市城壁をもたないとされてきた日本都市の歴史をも再考させるものである。